

大奥物語

2017年4月
2018年12月追記
我部山民樹

1. 大奥

- 大奥は3代将軍家光のときに春日の局が設置した。家光に男色の悪癖があったために、世継ぎ作りを心配して、大奥に側室を集めた。正室孝子とは最初からそりが合わなく、2代将軍秀忠がやむなく、別居させた。2歳年上の孝子は公家出身で、気位が高すぎるとか、嫉妬深いとか、原因については諸説あるが、いずれにしても世嗣を側室に産ませる必要があったので、春日局が大奥を設立した。

大奥の女たちは単に世嗣を産むだけでなく、表の政治にも密接に関わってきた。

- 本丸御殿は表、中奥、大奥に分かれていて、大奥は1000人以上の女の園で、且つ女の闘いの場でもあった。広さは2万平方メートル。

2. 大奥女中の地位

- 職制と給与

11代将軍家齊の頃は24の職階があった。

大まかな職階	年収（現在の価値にして）
上臈お年寄（大老職にあたる）	
御年寄（老中職にあたる）	3,000万円と300坪の屋敷
中年寄	
御中臈	この中から、側室は選ばれる
御次	1,000万円
御服乃間	800万円
御使番	

普通の侍の年収が800万円位

因みに大奥の予算は幕府の全予算の1/4～1/3を占めた。

- 登用
書道、裁縫ができること、そして面接を受けて、合否が決定
御使番から始める
- 御年寄りは表向きの老中に匹敵するほどの権力が有った。
- 将軍のお手が付き、側室になることも有った。

3. 服装

- 御台所（正室）は一日に5回お召し替えをした。着物だけの費用が年間13億円位かかった。

御台所の衣装



- ・お女中の服装は身分により異なる

4. 主な人物

4-1 春日局（お福）

- ・ 将軍秀忠の嫡男竹千代（3代将軍家光）の乳母
- ・ 明智光秀の重臣斉藤利光の娘お福
- ・ 三男の国松を世嗣にしようとした正室のお江与の方と対立、家康に働きかけて、竹千代を世嗣にした立役者
- ・ 3代将軍家光の世継ぎを得るために大奥を設立し、幾多の側室をリクルート。
- ・ 大奥総取締に就任
- ・ 家光の実母だったとの記録も江戸城の徳川実紀に残っている。

4-2 お楽の方（お蘭）

- ・ 4代将軍家綱の生母
- ・ お蘭は百姓の娘で父親は御法度の鶴をたびたび捕らえた罪で斬首となる。母親が永井家の家臣の後妻に入り、義理の父親が牢人し、古着屋を始めた。お蘭が店先にいた時に春日局が偶然見つけて、永井家の娘として大奥に上げる。
- ・ 家光の側室に召し出され、第2子竹千代を生む（4代将軍家綱となる）

4-3 お玉の方

- ・ 家光の側室で第5子徳松を生む。後の5代将軍綱吉（館林城主から将軍となる）
- ・ 元は京都の八百屋の娘

- ・桂昌院とよばれ、将軍の生母として権勢を誇った。
- ・後に‘玉の輿’の語源となった。

4-4 お夏の方

- ・家光の側室で第3子の長松（甲府宰相綱重）を産む
- ・6代将軍家宣（綱重の子綱豊）の祖母

5. 伝説の大奥女中

5-1 お振の方（おふりのかた）

- ・家光の側室
- ・尼から側室になる。側室第1号
男色にふけていた家光が、生まれて初めて心を奪われた最初の女性
- ・春日局の補佐役祖心尼の孫娘である。

5-2 右衛門佐（うえもんのすけ）

- ・綱吉の上臈御年寄であり、重職者は側室を兼ねない。（権力の集中を避けるため）
- ・側室のお伝の方が権勢をふるっていたので、正室信子（公家出身）が対抗策として、学問好きの綱吉好みの才媛の女性を宮中よりつかわせてもらった。それが右衛門佐である。寵愛で勝負するのではなく、頭脳で勝負する。
- ・独自の解釈を加えた古典の講義ぶりに綱吉は魅了される。
- ・将軍付の御年寄となり、千石を与えられる。
- ・綱吉は‘生類憐みの令’を発し、世嗣誕生を願ったができなかった。59歳にしてようやく実子誕生をあきらめ、嫌っていた兄綱重の子綱豊（後の6代将軍家宣）を養嗣子に定めた。
- ・大奥で名声を博した右衛門佐は空しさだけが残った？

5-3 絵島

（1）絵島の経歴

- ・小普請白井平左衛門の娘。綱重（後の6代将軍家宣）が館林城主だった頃に綱重の側室お喜世の方（後の月光院）に仕えた。綱重が将軍家の世継ぎになった時に、お喜代の方付で大奥に入る。やがて月光院が7代将軍家継の生母として権勢をふるうようになると、絵島は大奥トップの御年寄に上り詰める。

（2）絵島事件

- ・御年寄の絵島が月光院の名代として、芝増上寺に参詣した帰途、山村座で芝居見物をした。
江戸城に戻ったのは午後8時頃で、すでに平河門は閉まっていた。（閉門は午後6時）月光院の口添えで、門番に開けてもらい、入ったという。
城外に出る時、城中のことを他言することや芝居見物は禁止されていた。が、あくまでも表向きで、宿下がりや代参の折には、なかば公然と芝居小屋に立ち

寄るのが通例になっていた。大奥女中たちにとって唯一の息抜きだったと言える。

芝居見物はこの時が初めてではなかった。座元の家にも招かれたこともあり、役者の生島新五郎となじみであった。

- ・山村座では2階の棧敷席50間を絵島一行のために用意し、弁当も百人分あつらえていた。利権にあやかろうとする商人たちの賄賂や接待に慣れて、気も緩み、つい羽目を外してしまった。
- ・それから3か月後に表沙汰となった。生島新五郎を主犯として連座するものが続出。山村座は廃業に追い込まれた。
- ・大奥の女中たちも多数処罰され、連座する者が千五百人と言われるほど、大掛かりとなった。
- ・役人が狂言役者中村清五郎を拷問にかけ、その自白によって容疑を固めた。
- ・生島新五郎は石抱きの牢問に責め立てられ、絵島との情交を自白させられた。
- ・絵島は、一睡もさせずに尋問する‘現責め（うつつぜめ）’にかけられたが、情交は最後まで否認し続けたという。
- ・絵島は死罪を申し渡されたが、月光院が詫びをいれたので、信濃国高遠藩にお預けとなった。囲屋敷（かこいやしき）の中で終焉を迎えた。33歳で遠流されて、28年後のことであった。
- ・生島は伊豆大島に遠島となった。

- ・事件を調査して厳重に処罰するように指示したのは月光院との話もある。

(3) 事件の背景

- ・前将軍家宣の知遇（甲府城主時代からの）を得て、老中として幕政を担ってきた間部詮房や新井白石に対する譜代門閥層の妬みと反感があった。月光院の傘を着て幼将軍家継の後見に治まり、政局を牛耳っていると映った。

久留里城内の白石の像

久留里城主土屋氏に仕える

土屋氏改易に伴い職を失う。

江戸の朱子学者木下順庵に学

び、縁がって甲府藩主徳川綱豊

（後の第6将軍徳川家宣）に

仕える。



新井白石は、江戸時代中期の旗本・政治家・朱子学者。一介の無役の旗本でありながら六代将軍・徳川家宣の侍講として御側御用人・間部詮房とともに幕政を実質的に主導し、正徳の治と呼ばれる一時代をもたらす一翼を担った。 [Wikipedia](#)

間部詮房は、江戸時代中期の大名。相模厚木藩主、上野高崎藩主、越後村上藩間部氏初代藩主。側用人、老中格。徳川家宣・家継の二代にわたり、将軍の側近として幕政を主導した。 [Wikipedia](#)

- ・前将軍家宣の正室天英院派と月光院派の対立感情があった。光院、間部詮房、新井白石を失脚させようとした。が、自白を得られなかった。ので、失脚に追い込むことはできなかった。
- ・月光院派の勢力は大打撃を被ってしまった。

5 - 4 お美代の方

- ・11代将軍家斉の側室（16人の側室の一人）。
- ・智泉院の僧侶日啓の娘で、旗本の中野清茂の屋敷に奉公に出て、目をかけられて養女となり、大奥に送り込まれた。大奥の御次として出仕。たちまち、家斉の目に留まり御手付き御中臈となり、やがて御部屋様に出世した。
- ・養父清茂も出世し、2千石に加増された。
- ・実父の日啓は野心を募らせ、大奥女中を籠絡した。女中が智泉院詣でを始めたため、寺は大繁盛した。
- ・さらに日啓は野心を募らせ、廃寺の感応寺を上野寛永寺や芝増上寺のように将軍家菩提寺にしたいと考え、お美代や将軍の賛同を得て、感応寺を再建させた。
- ・家斉の死後、老中水野忠邦により日啓は捕らえられ、日啓は牢死した。その時には、大奥には手が出されなかった。
- ・大御所の御遺命と称する御墨付を盾に、家斉の娘熔姫が産んだ前田家の犬千

代を将軍家慶の世嗣に擁立しようとしたが、陰謀がばれて、家慶によりお美代の方は大奥から追放された。

5-5 姉小路（あねがこうじ）

- ・橋本権納言実誠（さねなり）の娘で伊代子という。
- ・12代将軍家慶の正室楽宮喬子（らくのみやたかこ）の輿入れに従って江戸入り、大奥に出仕。
- ・楽宮は出産したが、早死にした。正室としての地位はゆるぎなく、側室の子はすべて正室の御養いとなった。姉小路は上臈年寄となり、老中水野忠邦と組んで、家斉の愛妾お美代の方を大奥から追放した。姉小路は忠邦をやり込めたこともある。
- ・忠邦失脚後も、新たな老中阿部正弘と手を結んで権勢を維持した。家慶の死後、剃髪して、隠居した。

6. 徳川家存続に奔走した嫁姑

- ・姑は13代将軍家定の正室篤姫で、嫁は14代将軍家茂の正室の和宮。

(1) 篤姫

- ・13代将軍家定の正室。薩摩藩主島津斉彬の養女、さらに近衛右大臣忠熙の養女となり、将軍家に輿入れした。
- ・結婚2年足らずで寡婦となり、剃髪して天璋院と称した。
- ・井伊直弼の‘安政の大獄’時、養父島津斉彬が弾圧を阻止するために上洛しようとしたが、直前に病に倒れ、死去してしまう。
- ・養父島津斉彬亡き後、孤立無援の中で天璋院は毅然と奮い立った。
- ・一生薩摩には帰らなかった。

(2) 皇女和宮

- ・14代将軍家茂の正室
- ・孝明天皇異母妹で、公武合体のために将軍家に降嫁させられた。姉小路が幕府の依頼を受け、斡旋した。
- ・将軍家茂は第2次長州征伐の最中、大坂城で、客死する。
- ・嫁いで4年あまりで、寡婦となる。公家の岩倉具視が‘帰郷させるべき’と進言したが、婚家にとどまるのが女の道と考え、静寛院の院号で大奥に残った。明治になり、京都に帰った。

(3) 徳川家存続をかけて嫁姑が協力する

- ・周囲の折り合いも悪く、最初は大層仲が悪かった。
- ・15代将軍慶喜が大政奉還した後、官軍の江戸城総攻撃の進軍が開始された。
- ・篤姫は新政府軍の総督府参謀の西郷隆盛に再三に渡って、嘆願書を出した。薩摩より腰入時の世話係であった西郷はこの手紙を読んで、涙したといわ

れている。

- ・和宮は官軍の総督府に慶喜の嘆願書を再三提出させた。
- ・江戸城攻撃が避けられたのは、西郷隆盛と勝海舟の英断によるという話があまりにも有名である。が、裏に二人の活躍があったからこそとも言われている。

篤姫は

薩摩藩主島津家の一門に生まれ、ペリー来航に揺れる幕末の動乱期、

21歳で徳川13代将軍家定に嫁いだ篤姫。

夫の急死後、若き14代将軍家茂の養母として、

その妻和宮とともに江戸城大奥をとりまとめます。

やがて訪れた戊辰戦争時には

江戸城に迫る西郷隆盛ら新政府軍に働きかけ

江戸城の無血開城に大きな役割を果たした人です。

因みに、尾張徳川家の家祖は義直で、家康の側室お亀の方（相応院）が生母である。紀州徳川家の家祖は頼宣、水戸徳川家の家祖は頼房で、いずれも家康の側室お万の方（養珠院）が生母である。勝浦の正木氏の生まれ。

外房の勝浦の八幡岬公園内の
お万の方の像（正木氏の勝浦城址）



7. 将軍家の系譜

将軍	生母	正室	側室 (主な)	大奥 (主な)
2代 秀忠	西郷局 (家康の側室)	お江与 (継室)		
3代 家光	お江与	孝子	お振の方 (自証院) お楽の方 (家綱の生母) (将軍様御局) お夏の方 (綱重の祖母) お玉の方 (綱吉の生母)	春日局
4代 家綱	お楽の方	浅宮		
5代 綱吉	お玉の方 (桂昌院)	信子	お伝の方	右衛門佐 (将軍付御年寄)
6代 家宣	お保良の方 (甲府藩主綱重の側室)	天英院 (照子)	お喜世の方	
7代 家継	お喜世の方 (月光院)	無		絵島 (大奥御年寄)
8代 吉宗 (紀伊家) (紀州藩主光貞の側室)	浄円院	真宮理子 (さなのみやまさこ)		
9代 家重	深徳院 (吉宗の側室)	比宮 (なみのみや)	お幸の方	
10代 家治	お幸の方	五十宮倫子 (いそのみやともこ)	お知保の方	
11代 家斉 (一橋家) (治済の側室)	お富	茂姫 (島津重豪の娘)	香琳院他多数	
12代 家慶	香琳院	楽宮喬子 (らくのみやたかこ)	本寿院 お琴の方	姉小路 (上臈御年寄)
13代 家定	本寿院	天璋院篤姫 (島津斉彬の養女)		
14代 家茂 (紀伊家) (紀伊家斉順の側室)	実成院	和宮		
15代 慶喜 (一橋家) (水戸家の斉昭の正室)	栖川吉子	一条美賀子	一色須賀	

慶喜は水戸家から一橋家の養子に入った後で将軍になる。

以上